

連載

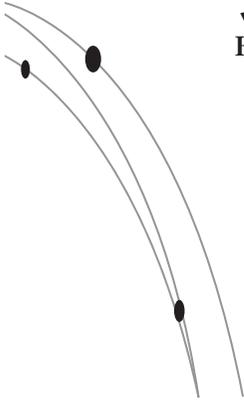
フィールド・アイ

Field Eye

デンマークから——③

オーフス大学 足立 大輔

Daisuke Adachi



デンマーク社会の慣行

過去2回の連載では、デンマークでの雇用にはじまり、教育、子育て、医療といった社会の仕組みについて感じることを書いてきた。最終回の今回では、より広く、デンマーク社会での慣行について、ユニークな点、驚いた点、日本居住者にとって興味深いと思われる点を紹介していこうと思う。前2回の内容に比べ、とりとめのない各論的な内容になってしまうことをご容赦いただきたい。

これまででも、デンマークは比較的内部的な調和を重視する閉鎖的な社会だということを暗示してきた。オーフス大学学費の内外価格差然り、内部者にとっては非常に使い勝手の良い成熟した医療システム然りである。実は、この点は外資系企業の受け入れにも反映されているようである。例えば、米アマゾン社はデンマークに進出していない。これは、過去に日本と米国で生活し、アマゾンの迅速な宅配サービスに依存していた筆者にとって驚きで、最初は必須インフラを奪われたような気持ちになったものだ。しかし実際、デンマークにおけるアマゾンの必要性はそこまで高くない。狭い国土をカバーする流通網と、オンラインショッピングサイトの種類と質はアマゾン以前から充実していたようであり、どんなオンラインページで注文しても、2~3日後には自宅のドアの前に荷物が届く。このことは、アマゾンが必需品ではなかったと、私の認識にカルチャーショックをもたらした。一方で、やはりこれら中小規模オンラインショッピングサイトの品揃えはアマゾンには及ばないので、そんなときは隣国ドイツやスウェーデンのアマゾンから荷物を

取り寄せるようにしている。EU内の流通の自由化はこのような形でも恩恵をもたらしているようだ。

このように、隣国に比べて外資系企業を受け入れない風土がある国だという認識が筆者にはあるが、未だに筆者の理解が及んでいないのが、米フェイスブックの（現Meta Platforms）サービスが深く根付いていることである。デンマーク人にとって、あらゆるコミュニティで、フェイスブックグループが必須ツールとなっている。オーフス大学の国際スタッフのコミュニティ然り、小さな子どもを持つママ友グループ然り、バドミントン同好会然りである。先述の通り、デジタル化の進んだ国家であるが、小国の利点を活かすづらいサービス（メッセージングなどは、2者間の距離の短さが実質的に意味を持たないといえるのではないか）では、その比較優位を生かすことができていないといえるのかもしれない。

前回、総合診療医の予約ではデンマーク語のウェブサイトを使うことが必須ということを紹介したが、このような特殊な状況を除き、一般的に言語の壁はほぼないといいよく、ほぼすべての国民が問題なく英語を話す。したがって、例えばスーパーや病院内でのやりとりで（外国人としての礼儀で会話の最初に“Could I speak in English?”の一言を入れるようにしているもの）急に英語で話しかけても流暢に返事が返ってくる。一方で、高齢層は比較的英語に対する苦手意識を持っているようであるが、住宅保険の購入の際に電話に出てくれた高齢のエージェントの方は、多少の訛りはありつつも、コミュニケーション上の問題といえるほどの障害はなかった。これらのことは外国人にとって非常に便利な社会だということを意味するが、一方で、この英語レベルの高さは現地語を学ぶことの障壁にもなるようだ。筆者はまだデンマーク語の学習を始めていないが、始めた同僚の苦勞の1つとして、デンマーク人とデンマーク語でコミュニケーションが成立しないとのことである。つまり、デンマーク語を話そうとすると、相手が気を使って英語に切り替えてくれることが多いらしい。デンマーク人からすれば、相手の非常に拙いデンマーク語を聞くくらいなら、こちらが英語に切り替えた方が楽だということなのかもしれない。

住環境について言えることは、とにかく家賃が高い。私が日本でよく聞かされた相場は「家賃は月収の3分の1」というものであるが、おそらく多くのデン

マーク住民にとってこれに従うことは難しいのではないかと思われる。オーフス市は人口30万人程度の中規模都市であるが、市内の2DKの部屋で洗濯乾燥機付きの部屋となるとほぼ月額1万クローネ（1クローネはおよそ17-18円）を超える。背後には金融政策の影響もあると言われている。すなわち、ユーロ圏全体に比べて堅調な経済成長の中で、デンマーク中央銀行はユーロとのペグを堅持しており、そのことによるインフレ圧力が住宅市場に表れているとのことである¹⁾。

ひるがえって住宅の中を見てみると、天井ランプがついていない部屋がほとんどで、独自のスタンドランプや蠟燭で日照時間の短い北欧の冬をやり過ごすのがHyggeligなノームのようだ。また、水道水については、デンマーク人は上水道システムを信頼しているらしく、水道水が飲めることを自慢している。しかし、軟水が出る日米の蛇口での生活しか知らない筆者にとっては、ヨーロッパの硬い水は口に合わず、追加の浄水器を購入せざるを得なかった。さらに驚きの点はシャワールームで、ほとんどの部屋にバスタブは常備されていない。上記のような額の家賃を払っても、大人1人がギリギリ入れる空間にシャワーヘッドとカーテンレールがある空間があてがわれるのみである。おそらく、バスタブがある部屋は相当スイートな物件と考えられているのではないか。大人は我慢して使えば良いものの、息子の入浴をこの環境で行うのには苦勞させられている。この点は、現在より低額予算の賃貸物件を見ていたアメリカでも、バスタブがある部屋を探すことに苦勞はしなかったことから、デンマークの（または欧州の）特異な事情といえるかもしれない。

食生活について。デンマークの食文化を私は寡聞にして知らなかったが、北欧圏をまとめてニューノルディック料理という、海産物の味を生かしたあっさりした料理が近年流行っているようだ。そのほか、伝統的に豚肉の料理が多く、皮付きの豚バラ肉をパリッとオープンで焼いたフレスケスタイなどが特徴的である。また、さすが酪農国というべきか、チーズとバターは安くて美味しい。お土産となるようなものは少ないが、リコリスというグミのようなお菓子がある。

これ単体ではクセが強いが、食べやすいようにチョコレートコーティングされているものも多く、そういうものは独特の風味と相俟って面白い味になっている。しかし、はっきり言って、デンマークでの食事については、このように料理名を具体的に数個挙げるのがやっつであり、全体的に言ってデンマークの食事が筆者の口に合う味とは言いがたい。また、欧米圏広範に言えることかと思うが、美味しい外食をしようとすると日本より高くつくことが多く、そのあたりも日本文化に慣れ親しんだものにとって実質賃金を低めてしまうように感じる一因と言える。

最後に、昨今のコロナ禍の中での人々の暮らしについての観察で連載を締めようと思う。デンマークの人々は本当にマスクをしたがらない。同僚のドイツ人から聞くに、欧米圏一般よりもその傾向は強いようだ。基本的に政府からのマスク着用義務化の号令が出るまで、建物内でマスクをしている人は非常に稀である。号令が出ても、屋外でマスクをしている人はほとんどいないし、屋内でもマスクを外している人を多く見かける。また、オミクロン株が大流行していた時期でも、スーパーの店員などはマスク着用義務が免除されているのか、していないことがほとんどだ。これは欧米だからというものではないように感じる。というのも、以前の所属のアメリカでは、コロナ禍の間中は多くの人がマスクをつけていたからだ。ワクチン未接種の乳児を持つ親として、非常に嘆かわしい状況といえる。

1) 金融市場と住宅価格の間の興味深い研究として、Christiano, L., Ilut, C. L., Motto, R. and Rostagno, M. (2010) "Monetary Policy and Stock Market Booms (No. w16402)," *National Bureau of Economic Research*. が挙げられる。なお、この研究では日本の80年代の低金利政策とバブルの関係性をも取り扱っている。また、デンマークにおけるこの現象を説明した動画があり、以下のリンクから見ることができる。
https://www.youtube.com/watch?v=hztserzu_M&t=301s

あだち・だいすけ オーフス大学経済学部助教授。最近の論文に“Robots and Wage Polarization: The Effects of Robot Capital by Occupations,” *Job Market Paper* (2022年)。労働経済学、国際経済学専攻。